
HEART & SOUL ～ 振れいく末路

伊野村雅之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEART & amp; SOUL 〽 捩れいく末路

【Nコード】

N7057M

【作者名】

伊野村雅之

【あらすじ】

今、この世界を揺るがす大きなうねりが発現する。

二人は未だそれを知らず。

ねじ曲がった世界を旅する、

これは彼等の物語。

（この話は第二部となっております。最初からご覧になりたい方は、第一部へ争抗×慈愛からどうぞ）

現在鋭意製作中！

（ペースは遅いかも（へーへ；）

I n t e r l u d e . 時告げる始まり（前書き）

さあ、ついに第二部へ護るための闘いが始動します。

これにより、先々の作品の中でかなり危ない表現が頻出いたします。

拝読には充分ご注意ください。

この話から読み始めるとおっしゃる方も多いかと思われます。

しかし、お読みいただく際には第一部へ争抗×慈愛を先に見てくださるとありがたいです。

I n t e r l u d e . 時告げる始まり

あてどもなく旅を始めたサカキチユキ。

ただ目的だけを続けてきたオーキドナツマサ。

二人が出会い、恋に落ちたのは宿命と言う名の運命。

その先に待っているのは過酷で、遠く長い道。

二人は護るための力をつけるために、旅を始める。

この世界を壊させたくないから。

この世界を護るために、…今二人は立ち上がる。

どんな時も、どんな場所でも二人は乗り越えていける力を秘めている。

それに気が付くのはしばらく後になるかもしれない。

それでも、護るために戦う事を決意したのだ。

※ ※ ※ ※

―平和など…要らぬ。ただ、私は欲しいのだ。

私だけの世界が。その為にはすべてが邪魔だ。

すべてを消し去るには大いなる力が必要だ。…人間による人間の支配も既に廃れきった。

今度は私がすべてを支配する。

闇よ、邪悪なる精霊たちよ！我の声に応じて叫べ！

すべてを支配するために…私はT I I D Aの最高経営責任者である彼の闇に取り付いた。

クフフ。

このものの闇は純度が高く、瞑さも申し分ない。

私は力も衰え、こうして人間の誰かに継らなければ生きる事は出来ない。

ある程度選ばれた人間は必要となる。：だからそれぐらい私には容易い事だ。

見ているが良い。この世界がゆっくりと廃れていく様を。

—

I n t e r l u d e . 時告げる始まり（後書き）

さて、次より本格的に話は進みます。

尚、C h a p t e r . 4 1 よりのスタートとなっております。

ご注意願います。

Chapter. 41 ウバメの精霊（前書き）

最後までかなり悩みましたが、さすがにツインダブルバトルは難しく（^ー^；

セレビィに協力を仰ぎました。

Chapter. 41 ウバメの精霊

9月28日―

陽が昇る頃。

「お世話になりました」

「道中気をつけてね。あ、ちょっと待って！」

キハチ親方は二人を呼び止める。

「居合斬りの秘伝マシンと、木炭だよ。ポケモンを見つけてくれたお礼さ！」

親方は白いマシンディスクをナツマサに、木炭をチユキに渡した。

「「ありがとうございます」」

チユキとナツマサは急いでヒワダタウンを後にする。

仕事はたくさんあるのだ。

ウバメの森には、森の神様を奉る祠が中心に建立されている。

その祠を調べている輩がいると聞いた為、急がなくてはならなかった。

ウバメの祠前にある細い樹を、秘伝マシンでニューラのララに覚えさせて

「ララ、頼んだ！」

「お任せ下さい…はあっ！」

細い樹は瞬く間に切り刻まれて、祠が目の前に現れた。

同じタイミングで、時渡りの鐘が鳴り響いた…

リー…ン ゴー…ン

「な、何これ…」

「これ、は…時渡り！」

ナツマサはすぐにわかった。

翠の光が祠前で輝きはじめ…

光の中から聖霊であるセレビィが飛び出した。

セレビィ「お待ちしておりましたわ、アルフェウス様にベータウロ様」

??「やはり此処でしたか」

低い声が聞こえた途端に祠の裏手から職種のように長いアームが飛び出してきた。が…

ナツマサ「辻斬り！」

ララの辻斬りがざんばらりと斬り捨てた。

チュキ「Wild、セレビィをお願い！」

Wild「承知した！」

古いフレンドボールから、リングマが飛び出した。

Wild「ララ、後ろ頼んだぜ！」

ララ「私を誰だと思ってるの？」

Wildは若干顔を引き攣らせる。

Wild「ふ、相変わらずだな」

セレビィ「今はそれ所じゃないですね…私も力をお貸ししますわ」

セレビィはかなり攻撃的な性格だった。

機械の触手は、セレビィが放ったリーフストームに押し戻される。

?? 「ちっ、面倒ですね…」

祠の上から、ボールが飛び出した…

チユキは何かを感じた。

それは、ボールの中にいたトゲピーのF i n eも同じだった。

チユキの目が鋭くなり、ボールを投げて短く指示を飛ばす。

チユキ「守る壁で包んで！」

目つきの鋭いトゲピーがボールから飛び出し、向こうから投げられたボールから飛び出たビリリダマを

翠の幕でコーティングした。

ドカンッ！！

ビリリダマは大爆発をしたが、守るの幕で、辺りに被害は全く出なかった。

Fine「ばーろい！俺達をナメんじゃねえ！」

FineはWildの頭に乗った。

Wild「まだ来るぞ、気を抜くな」

Fine「わぁってる！」

ナツマサも、トゲピーのトトを繰り出す。

ナツマサ「トト、ララの援護を！」

トト「承知しましたわ！」

?? 「……外衆^{げす}が……寄ってたかって何故」

祠の裏から、ヤミラミ・ヤミカラス・カゲボウズ・ムウマが飛び出す。

セレビィの碧の光りはチュキとナツマサのポケモンに変化を齎した。

セレビィ「皆に力を！碧の贈物^{フラワーギフト}」

チュキ「！こ、これ…」

Wild「動くぞ！」

ララ「ですわね」

闇烏・闇目 「「ここから立ち去れ！」」

影坊・夢魔 「「出て行け！」」

セレビィはまた時渡りをした。

ポケモン達とチュキ、ナツマサは翠の光に包まれ、鈴の音が響く――
チリン

という音で、セレビィとポケモン四体、チュキとナツマサの姿が消える。

?? 「また、時渡りか…」

誰かは舌打ちをして、その場を後にする。

Chapter. 41 ウバメの精霊（後書き）

聖霊にしようか、精霊にしようかも、最後まで悩みました。

いろいろ伏線あってもあれなので、とりあえず控え目に。

今回は時間かかったなあ……

[2010／8／8]

Chapter. 42 アルセウスと三舞台

セレビィは、同じ時間の育て屋へと時渡りしていた。

セレビィは初めて大人数の時渡りをして疲れたようだった。

「何だか……眠いや……」

チユキ達トレーナーの後ろに居るポケモン達四匹は

リングマ♂のWildの左肩にトゲピー♂のFine、右肩にトゲピー♀のトト、頭上にニューラ♀のララがいる。

三匹は急に周りの景色が変わり、びっくりしてWildにくっついたのだろう。

そのまま眠ってしまうセレビィをチユキが抱える。

「わとと…」

「セレビィかえ？」

奥から、御祖母様の優しい声が聞こえる。

とても優しくそうな御祖母様がカウンターに現れた。

「あれまあ」

と少し驚いた顔でチュキとナツマサを見る。

「いやいやいやいやあ…」

御祖母様はチュキを懐かしそうな目で見つめる。

「あんた、サカキサトシの娘だね」

「は、はい」

チュキの父親である、サカキサトシはかなりの有名人だ。今彼を知らない人はいないぐらい、それ程有名である。

しかし、娘の存在はほとんど公にはされていない。

すぐ気づいたのは、ぼんぐり職人のガンテツイツサイさんと国際警察のクールアイさんだけだ。

それほど似てはいないのだが、家族というものは目に見えない程深く繋がっているのだなあ、とナツマサは思った。

「セレビィはの、正しい心を持った金色の心と銀色の魂をの、探しておったんじゃよお」

チユキとナツマサは複雑な表情で顔を見合わせていた。

金色の心と、銀色の魂の事をチユキ達が聞いたのは昨日の事だ。

「セレビィが回復するまで、幾分か時間があるじゃろうて。どれ、ばさまが一つ良い話をきかせちゃろ」

チユキとナツマサはカウンターのベンチに促されて座る。ポケモン達は柵の向こうで戯れていた。御祖母様は目を細め、ベンチに茶を運び、自分もベンチに腰掛けた。

「遙か遠い昔の話じゃ。この辺りでもアルセウスを奉る場所があっ

たそうな。昔の人は、崇めるための三舞台を作った：左下が、時の紋様。右下が、空の紋様。アルセウスはあ時と空の力で、この世界を作りなすった。

しかし、それだけでは世界が安定せんかった。支えとなるもう一つが必要だと知った。ほれ、あんたの母さんはよお知ったんでないけ？」

ナツマサは不意に頭のスイッチが点灯したように顔をあげた。

「世界の裏側：反転世界！」

御祖母様は目を細めて微笑んだ。

「その反転世界がある御蔭で、この世界は安定し存在しとるだ。時間流れ、空間はどこまでも広く：それを支えているのは反物質。この構図は今も昔も変わらない系図じゃ」

「DNAと同じようなものですか」

チユキも納得できた。

「昔の人もそれを判っておっただね。頂点に描かれている裏の紋様が一番重要だと知ってただ。三舞台はそうして作られただ。」

年月が経ち、エンジュに移り住んだ昔の人はアルセウスを崇める舞を世に伝えた。不思議なことに、虹の神ホウオウ・海の神ルギアをも、その舞で引き寄せられた。アルセウスはすべてを作り出した絶対神、神は神に引き寄せられるだ」

御祖母様の話は、とても心地好かった。

「セレビィは守の神^{もり}。唯一時を渡ることを許された神。昔の人は、まだ何も知らぬうちからセレビィの祠を作った。今では苔だらけだけど、森が豊かな印で、祠だけは昔のまんまだ。まあ、周りはずいぶん様変わりしたがの」

「んゝ…」

チユキの腕の中で、セレビィは目を開けた。

「どれ、お茶でも飲むけ？」

御祖母様はもう一つ湯呑みを出していた。

セレビィはコクンと頷いて、湯呑みを受け取る。

「この茶は、ラムの葉とオボンの葉、リンドの葉をブレンドした特製の茶での、これを飲むと疲れが取れるだ」

確かに、チユキ達の体は楽になっていた。

やはり木の実の葉っぱだけでも侮れない。

「さて、今度は何が遭ったか話してくれるかな？」

チユキは口を開いた。

「実は…」

—

Chapter. 42 アルセウスと三舞台（後書き）

育てやの御祖母様はカンタのおばちゃんをリスペクトしてオマージュ致しました。

同時進行ですがよろしく（笑）

〔2010／8／14〕

Chapter. 43 鋭い爪、黒い涙

チユキから事の顛末を聞いた育て屋の御祖母様は柵向ここのニューラのララを見ている。

「成る程の。…時に御主のニューラじゃが…」

「はい？」

ナツマサは立ち上がる。

「もう一段階強くなってみる気はないかえ？」

御祖母様の手には弓なりに曲がったものが握られていた。

「進化…ですか？ララが…」

「おまえさんのニューラの気持ち次第だかの」

ナツマサはニューラのララを見つめる。

ララがそれに気付いて柵の側に近寄る。

「ナツ兄貴？」

あまりにもシリアスな空気に、ヤンキー口調が響いたので、

「「ぶっ」」

と、チュキとナツマサは吹き出した。

「?どうしたんすかあ？」

ポケモンの言葉が解らない御祖母様も、不思議そうな顔をしている。

今までララの口調を気にする暇が無かったので余計におかしかった。
それ以上に武士口調のリングマのWildがよっぽど面白かったのだ。

二人は何とか笑いを堪えて、やっとナツマサは喋りだす。

「あ、のな。進化してみる気はないか？」

「進化っすかあ？めんどくさっ」

チユキとナツマサはマニニューラに進化したララを想像した：

：明かに夜露死苦！といいかねないというのと、ヤンキー口調が今以上に嵌まっていると可笑しくなって、

二人は我慢できなくなった。

「「ぶあーっははは！」」

抱腹絶倒する二人を見て、頭を傾げる御祖母様とララ。

ひとしきり笑った後で、ナツマサはやっとララの顔を見るが、明らかに不機嫌な顔をしていた。

「なんなんっすか？正直イラついたんすけど」

「ごめん、ごめんで…」

チユキも笑いを何とか抑えて、Wildに歩み寄る。

「一時手持ちにいたとはいえ、貴方とはちゃんとしたトレーニングをする必要があるわね」

「そうだな」

Wildも同意した。

「それなら他のポケモンを一時ワシに預けて、コガネ自然公園でトレーニングすると良からう。ちょうど今日はシキジカの祭があるし、行ってみて損は無いよお」

シキジカは五年前に発見された新種のポケモンで、季節ごとに身体の色を変えることでエンジュの守り神と言われている。

「シキジカ！」

チユキは声をあげた。ポケモンマガジンでしか見たことの無いポケモンだから余計に楽しみで仕方ない。

「自分に合ったシキジカを仲間にすることも出来るから、大勢の人が来るが…そうそう。最近この辺りでムンナが出るから…それで捕まえる練習をすると良からう」

「ムンナ！丁度良いや、ムンナの夢運びを見たいからさ」

今度はナツマサが興奮する。

実は、セレビィが時渡りをした時に問題が発生していた。

本来、有り得るはずの無い世界が

現出する、という……

言わばパラレルだ。

しかし、その変化に二人は気づかない。

それこそが、コトネとヒビキが未来へ飛んだ理由となる訳だが、…
ここで話すのは控えることにしよう。

この話の原作にブラック&ホワイトが書かれている一つの証明だ。

…話を戻そう。

そして、事態が大きく動き出す。

それも急速に悪い方向へ―

＊ ＊ ＊

「カラザ様」

呼ばれた人物は、背もたれのある椅子から立ち上がる。

「スワンナの捕獲は進んでいるのか？」

「極めて順調です。モグリューもキバコも順調ですが…」

黒ずくめの彼が言い淀む。

「ん？」

「メグロコは特性の自信過剰と威嚇で難航しています」

カラザはフゥと溜め息を漏らして、

「…仕方あるまい。あのボールを使うことを許可する」

と指示を出す。

「承知しました。」

黒ずくめの男は入り口前で礼をし、部屋を後にした。

カラザは椅子に身体を預けて、表情を曇らせる。

机にある写真立てを手に取り、更に表情を歪ませる。

「……ニューロ、どうしちゃったんだ…」

カラザの目から一筋の涙が確認された。

—

Chapter. 43 鋭い爪、黒い涙（後書き）

悪になってしまったのにはすべての理由がある。

敵も大きくフィーチャーしていきます。

ニューロはNで、カラザはニューロの親友です。

黒い涙、かなり大きな伏線となります。

チユキ達が真相を知るのは、かなり後になるでしょう。

[2010／8／26]

Chapter. 44 シキジカ祭（前書き）

新ポケモンも沢山！

ブラックホワイトの世界が待ちきれない君に一足先に見せちゃうぞ！

最後はかなり盛り上がってるポケスロンだ！

どんなアスリートがいるのか楽しみだね！

—

Chapter. 44 シキジカ祭

育て屋のすぐ傍から、自然公園に行くコガネバスが定期的に出ている。

5分間隔で育て屋⇄コガネ⇄自然公園に出ている利用者数もかなり多い。

特に五年前から自然公園では季節のポケモン祭が行われていて、観光客数は遂にエンジュを越えたのである。

エンジュの祭がここで行われるようになったのは鐘鳴の塔の為だった。

鐘鳴の塔に問題が遭ったのではなく、エンジュの地に災いが起きた原因がその祭であった為だ。

話を元に戻そう。

シキジカ祭とは九月二十六日から五日間ある祭で沢山のシキジカが放牧され触れ合える祭。

入口で一つだけ受け渡されるShineBallシャインボールでしかゲット出来ないのである。

乱獲してしまうと生体研究が出来なくなるためだ。

祭時は特別なシステムが作動し、一度来たら二度目は入れないようにしており、祭の入場者数も決まっている。則ち、祭でシキジカを捕まえられるチャンスはたった一回のみと大変難しいのだ。

ポケモンバトルのように体力を減らすことは出来ない。言わばサフアリ型である。

二人はバスに揺られて自然公園に着いた。

「う、わぁ…！」

「おっきー！」

自然公園のゲートは、かなり大きかった。

二人の横にいるリングマのWildと、ニューラのララもゲートをマジマジと見上げていた。

ここで自分達はトレーナーバトルをするのか、と身を奮い立たせる。楽しみで仕方ないという感情が全面に出ている。

最初のポケモンをシキジカにしようと初心者トレーナーもいるが、祭の本文：則ちメインは1on1ガチンコトレーナートーナメント“シキジカエンジュ杯”である。

自慢のポケモン一匹をエントリーし、闘うこのバトルは優勝すると特別な卵を選ぶことが出来るのだ。三位以内なら確実に卵は貰えるが、選択肢は減ってしまう。

エントリーは二十六日から三日間。
今日が最終日だ。

ギリギリ間に合った。

「あ、あれじゃない？」

ゲートに入ってすぐ、受付は見つかった。

“エンジュシキジカ杯エントリー”

今日はそんなに並んでいなかった。

一昨日、昨日でかなり申し込んだのだろうが、実は今日のエントリーが重要だと御祖母様から聞いた。

この日のエントリーは絶対数が少ないのが例年で、その人達は優先的に決まるのである。と言うのも、早目に来ている人はポケモンの最終調整をする時間があるが、最終日には時間が無い。必然的にエントリーできるのだ。

一昨日・昨日の人は当日のポケモンのコンディションでふるいにかけられる。

全て抽選だから、と早目にエントリーする人が圧倒的大多数なのである。

「エントリーお願いします。」

「はい。P－Phoneを端末に繋してくださいね」

受付のジョーイさんがチュキ達に促す。

「フタバのチュキさんに、マサラのナツマサさんですね。エントリーするポケモンはこれで良いですね？」

「「はい」」

ジョーイさんは優しく笑って

「お似合いね」と二人に言う。

チユキとナツマサは顔を赤くする。

「抽選結果は今日の夜、P－P h o n eに届くわ。シキジカ祭の入場受付もするけど、どうしますか？」

「私、行く！」

「俺はポケスロンの方見てくわ」

「じゃあ…五時にバス停で会いましょ」

P－P h o n eで時間を見るチユキ。

「おう」

ナツマサが受付から離れると、ジョーイさんがチユキに話し掛ける。

「無骨そうにみえて、優しいのね」

「え、あ。はい」

チユキは何となく恥ずかしかった。

「もし決勝で当たったら、どっちが勝つのかしら？」

「ナツマサに負けない自信だけありますから！」

ジョーイさんはくすつと笑う。

「シキジカ祭のエントリーをしたわ。これがシキジカをゲットするためのShineBallよ」

ジョーイさんから黄色い星が縁取られた黒いボールを受け取る。

「チャンスは一度。再入場も出来ないから慎重にね」

「ありがとうございます！」

チユキがゲートから出ていくのを見送ると、ジョーイの声が少し変わった。

「フフ、どっちが優勝するのかしら？」

その声は、ブルースカイのものだった。

「さて、もう一仕事頑張りますか。」

＊ ＊ ＊

ポケスロンは昔の先験者が伝えた十の課題をスポーツ用にアレンジして出来た、ポケモンとトレーナーの絆が試されるアスレチックである。

自分と絆の強いポケモンを三体選抜して、トライアスロンを行い、最も獲得点の高いチームが優勝するものである。

シキジカ祭に伴い、ポケスロンも否応なく盛り上がるのだ。

「この地方じゃ見られないのも沢山いるな。あれはユキワラシにウリムーにタマザラシ。氷のアスリートかあ」

「あっちはラルトスにマネネにリーシャン。エスパーツね」

「ま、いや。俺らは観戦が目的だからな」

「鍛えなくて良いんスカ？」

「無理なトレーニングはコンディションを悪くするからな。特にラは今日は頑張ってくれたし、休むのもトレーニングだよ」

「そんなもんっすか」

「バトルはそんなもんさ。それに抽選に当たらないとも限らないだろ」

「∴それもそうっすね」

ポケスロンドームの観客席は広がった。
これからパワーコースが始まるところだった。

『ポケスロンシキジカカップにようこそ！今回はパワーコース。輝く勝利は誰の手に渡るのでしょうか！？それでは選手紹介！』

どんな障害も乗り越えてきた！どんなハードルも乗り越えてきた！チームサトシのピカチュウ、フカマル、サイホーン！

パワーとは則ち可愛さ！そのパワーを信じられるか！？チームアカネのピクシー、プクリン、ライチュウ！

常識を捨て去れ！これが現実なんだ！チームダイゴのハッサム、フオレトス、レアコイル！

出た、テレビで人気の私の双子の兄！遂にポケスロンに参戦してくれたー！チームハジメのカイリキー、サイドン、グランブル！

すっかり有名なトレーナーと、元ジムリーダーとハウエンチャンピオンと私の兄の夢の試合に私興奮しています！

それでは開催します！一番目指して、レッツポケスロン！』

—

Chapter. 44 シキジカ祭（後書き）

どーだい、ありえないだろ？

でも書いてて盛り上がった！

皆はどうだったかな？

楽しんでくれよなっ！

しかし、サトシは不変だな（^ー^；

まあ、アニメの看板だもんね。

大人サトシがみんな見たいのだよ！

（君だけとちゃうんかい）

「2010／8／28」

Chapter. 45 大人達／笛の力（前書き）

これより、二話連続投稿と相成ります。

一つ目は、まんま大人達のポケスロン風景。

もう一つは、絶対使いたかった謎の笛をピックアップしました。

Chapter. 45 大人達／笛の力

『選手のみなさん、お疲れ様でした！素晴らしい戦いでした！さあ、どのチームが一位でもおかしくない結果発表です！』

チャレンジ精神あふれるボーナスは：サトシチーム28ポイント！アカネチーム30ポイント！ダイゴチーム32ポイント！ハジメチーム31ポイント！

個人賞ノーミスボーナスはサイホーン、ピクシー、ライチュウ、レアコイル、サイドン、グランプル！

ポイント王はカイリキー！

努力賞はハッサム！

そして全ての競技ポイントが足されます：

四位サトシチーム325ポイント

三位ダイゴチーム336ポイント

二位ハジメチーム341ポイント

優勝は370ポイント獲得のアカネチームだー！

流石コガネジムリーダーの母！その強さを見せ付けた！！』

アカネ「いよっしゃー！」

短いピンク色の髪が軽やかに跳ねた。

サトシ「あっちゃー。でも、よく頑張ってくれたね。皆」

サトシは右足をくじいたピカチュウを抱いて、労をねぎらう。

ダイゴ「流石地元の方ですね。動きに無駄がなかった」

ダイゴはアカネに賞賛の言葉を送る。

アカネ「うち、最近全くトレーニングせえへんかったから。勝つとは思わなかったん…」

アカネは、すっかり大人になっていた。

サトシ「お久しぶりです、ダイゴさんにアカネさん」

ダイゴ「やあ、久しぶりですね」

アカネ「ホンマやなー！サトシも男前になったんとちゃう？」

三人とも、久しく見ていなかった顔が揃った為、プチ同窓会状態になっていた。

『続きまして、スピードコースが始まります！選手はミシロのハルカ、クチバのマチス、カンナギのシロナ、トクサネのフウです！』

サトシ「前に会った人達ばかりだな」

今のアナウンスを聞きながら三人は観客席に移動する。

ナツマサ「…さすがシキジカ祭…凄いトレーナー呼んでるな」

ナツマサはビックリしていた。

「この調子だと、母さんまで出てるかもな…」

フウ、とため息をつく。

「いちゃ悪かったかしら？」

後ろから機嫌の悪そうな声が聞こえた。

「か、母さん?!」

「サトシに誘われてね。ナナミ博士も呼ばれてるのよ」

「…マジで？」

「ナナミ博士はテクニックコース、私はスピードコースにエントリーしてるの」

「…凄っ……」

「…ところで、チユキちゃんは？」

「嬉々迫る勢いでシキジカ祭行っただけ…」

ユカリは思わずクスッ、と笑う。

「やっぱりサトシの娘ね。気になるポケモンは必ずGETしたいのよ」

「サトシさんも？」

「言ったでしょ？昔サトシと二年シンオウを旅したこと」

＊ ＊ ＊

「やっぱりオドオドしてる。…トレーナーの殺気のせいね……」

チユキはシキジカ祭の凄さを目の当たりにしていた。

ベンチで屋台のヤキソバを食べながら、その凄惨な光景を見ている。

「…使っちゃお。」

旅立ちの際に、父親からオカリナのようにだけれど、こつこつした笛を貰っていた。

曲は… “オラスイオン”。

トウ トウ トウルー ウー トウ トウ

トウ トウ トウルー ウー トウ トウ

ルル ルー ルー ルー ルー ルー

トウルル ルル

すると、自然公園の中は安らぎに満ちた。

笛は音、と言うより波長として拡がった。

この笛を演奏できるのはアルフェウスだけで、他の者が吹いても何も起こらないのだ。

気付けば、チュキのShineBallの中にシキジカが一匹既に入っていた。

「うあ?！」

ポピッ!

ビックリして、口に笛を付けたまま驚いた為、変な音が出てしまう。
皆もビックリしたようだった。

(待てば海路の日和あり?何れにしても、超ラッキー!)

チユキは静かに喜んだ。

そうしないと、どうやってGETした?と群がるような気がしたから。

小躍りしながら、綿菓子屋の屋台へ寄る。

「綿菓子くださいー!」

「小・中・大どれにする?」

意外な質問に、綿菓子のお店を見ると：

「で、デカっ!!」

「カビゴンの綿菓子屋だからねえ」

なるほど、と納得のデカさ。

「じゃあ、中で」

どれくらいデカいかと言うと：

小は（直径15?）、中が小の二倍（直径30?）、大は軽自動車並のデカさ（直径1.5?）である。

「…大って、どーやって作るんですか？」

「裏手に特注の綿菓子製造機があって、それで作るんだよ。あい、150円」

話しながら、屋台のおじさんはあっという間に綿菓子を作っていた。

「お見事、職人技！」

「嬉しいこと言ってくれるねえ、120円で良いや！」

チユキは見事に値切りを成立させていた。

実はヤキソバ屋でも値切りを成立させており、ヤキソバ屋では周囲の皆にコストパフォーマンスをして、実質売り上げがかなりの勢いで上がった為、ただで貰う事に成功していた。

簿めさせたら世界一の母親の元で育っているだけに、将来が未恐ろしい…（笑）

……ゴホン、話を戻そう。

ホワホワの綿菓子を一口かじれば…

「ん〜！おいふい〜♪」

Wildにもおすそ分けしてみる。

「…甘いな」

「綿菓子ってそーいう食べ物なの」

あまりいい顔をしなかったので、声をかけずにいたら…

「あの、もう一口…」

と言ってきたので吹き出してしまう。

（もう、かわいいー♪）

「良いよ、はい！」

Wildに綿菓子を向けると、可愛く一口かじる。

バトルで見せない可愛さもあるし、ポケモンという生き物は本当に奥が深い。

シキジカ祭を思う存分堪能したチュキであった。

—

Chapter. 45 大人達／笛の力（後書き）

何の笛か、お分かりになりましたか？

アルセウスでオカリナ型の笛といったら…あれしかありませんよね。

後、個人的にオラシオン大好きなんです（＾Ｏ＾）

時々アニメでも使われますね。

〔2010／9／7〕

Chapter. 46 すぐ傍にある危機（前書き）

平和の裏側には危険もある。

と、いう事でシリアス部に急遽突入。

第一部を見てもらうとわかりよいかも。

—

Chapter. 46 すぐ傍にある危機

四人は自然公園グランドホテルに泊まることにした。

このホテルは自然公園の最奥にあり、祭事があるとすぐ満室になるが、普段も結構混む。立地場所もかなり良いし金額も格安のため、相当人気も高い。

チユキは育て屋のジョウガヤサユキさんに電話をするところだ。

「あ、もしもし。ジョウガヤさん」

『チユキちゃんじゃな？ 皆は元気じゃぞ』

「すみません、後二日預かってもらえますか？」

『構わんが…トゲピー達が偉いさびしがっとなるんじゃが……』

電話口からトゲピー達のブーイングが聞こえる。

『マスター、未だ戻らないのー？』

『ナツマサ様は元気ですかー？』

「ごめんね！今日ちょっと家族がいてそっちに行けそうにないの…」

『『えー？！』』

耳をつんざく声は、親であるサトシとユカリにも聞こえた。

「どうした、チユキ」

とチユキの父親であるサトシが尋ねる。

「トゲピー達がさびしがってて…」

「いや、今のは明らかブーイングだったけど…」

ナツマサはちょっと呆れていた。

ナツマサも耳を抑えている。

PーPhoneは同じグループなら同時会話が出来るのだ。

『トゲピー達だけでも転送させたいのじゃが、…どうするか?』

ナツマサとチユキは顔を見合わせる。

「どうしようか…」

「そうしてもらった方がいい」

サトシが転送に賛成していた。

「せっかくだから二人の手持ちを見ておきたい。全員転送してもらえ」

「「…?」」

チユキとナツマサは首を傾げたが、それに頷いた。

「あ、じゃあ全員お願いしていいですか?」

『ほっほ、一人千円じゃ』

「はい、お願いします…千円?!」

ワンテンポ遅れてチュキは仰天した。

『ここを何と思う？ 安心せい、それなりに皆育ったぞい』

「…わかりました。転送番号は953—831—****—123
3です」

納得行かない複雑な表情のまま、ホテルと部屋の番号を伝える。

すぐにポケモン達が転送されてきた。

“ウケトリノサイント、オカネヲイレテクダサイ”

…しっかりしてる。

指紋認証のところに親指を当て、お札挿入出場が開く。

『確認したぞい。次はナツマサの分じゃ』

チユキは転送機からモンスターボールを取り外す。

「予定外の出費だよ…」と歎いている。

「向こうも商売だからね。早いところ気づいてよかったじゃん」

と、呑気にいうサトシだったが雰囲気がすぐに変わった。

「さて、チユキとナツマサに話さなきゃ行けないことが三つある。まず一つ目は、何故俺がここにいるかという事…俺は白金山の調査の後、ポケモン協会がこのイベントを教えてくれたからなんだ。二つ目は、そのトゲピー達に会うため、と言うのはそのポケモンには秘めたる力があり、君達をサポートするためのポケモンなんだよ。三つ目は…気付かないか？どうして新種のポケモンがこの地方にいるのか、ってね。それは時系列が歪みはじめた証拠かもしれないんだ。…気付かなかったのか？」

サトシは眉を潜めた。

普通なら気付くはずだが、と言うように二人を見るのだが二人には検討もつかない。

「…もしかして、つい最近セレビィの時渡りを経験したりした？」

ユカリはハッと気づいた。

「ああ、そっか！それなら気付かない理由もわかる」

サトシも納得して膝を打つ。

話の见えない二人は逆に腑に落ちない表情になる。

「お父さん、ちゃんと説明してくれない？」

「うん。セレビィの時渡りに遭った時、特殊な時渡りを受けるとパラレルワールドに迷い込むことがあるんだ。今は時系列が不安定な状況だから、その影響で他の人にもその歪んだパラレルワールドが継承されるんだ。俺とユカリはポケモンだからその影響を受けない替わりに違和感があるってことさ」

「確かに今朝、セレビィの時渡りを受けましたけど…時渡りと言うより空間瞬間移動をしたような」

ナツマサは丁度、時渡りを受けるときに時計を見ていた。

しかし、時間は変わらず周りの景色が変わっただけだったのだ。

サトシは頷く。

「セレビィは二人をこの地方に新ポケモンがいるパレルワールドに連れて来たんだ。セレビィは少し過去に戻るつもりだったんだろうけどね」

「後…時系列が歪んでるってどうしてわかったんですか？」

今度はナツマサが質問する。

「俺達はポケモンだろ？時間を司る神に直接聞いたんだよ。時系列の歪みが収まるまではこのまま時の流れに身を任せるしかないみたいだな。他に聞きたいことはある？」

ナツマサがサトシに質問している間、チユキはポケスロンドームの方を見ていた。

「どうしたの、チユキちゃん？」

ユカリがチユキの傍による。

「あ……いえ、なんでもないんです」

ユカリもポケスロンドームに集中する。

…何人か話している声が聞こえてきた。

《……ギアルのプラスとマイナスを揃えとけよ。明後日の決勝戦に爆発を決行する。我がDARKERの力を世に知らしめる》

《承知しました、N様》

チユキとユカリは目を見開く。

「今の、…聴こえたわね？」

「はい。ギアルって齒車ポケモンを使って爆発を起こす…と」

「「えっ?!」」

サトシとナツマサは仰天した。

「確かに出来ないことではないわ。しかも明後日の決勝戦ですって…会話の内容から察するに、人を傷つけることはないにしても…危険だわ。プラスとマイナスを揃えるってことは威力が格段に上がるってことだから…多少の怪我人は出ると思うわ」

「警察に伝えた方が…」

と、チュキは知り合ったクールアイの番号を呼び出す。

しかし、ユカリが止める。

「でもそうしたら挑発してしまう事にならないかしら？」

「クールアイさんなら信用できるわ！父さんも知ってる人なんですよ？」

サトシは暫く考えて：

「あ、それって倉石刑事の事か！」と思い出す。

「あの人なら秘密裏に適してる。悪くないかもな」

「倉石：って、クールアイさんの本名？」

チユキがサトシに尋ねる。

サトシは頷く。

「あの人は、ポケモンと深い絆で結ばれている。だから強いんだ。俺なんか、歯がたたないんだ。ずーっと負けっぱなしさ」

「そんなに強いんだ…」

『どうした、チユキちゃん』

「こんばんは、クールアイさん…今日は外じゃないんですね」

* * *

クールアイは確かに内偵をしていた。しかも、ポケスロンドーム内で。

「…まあな」

『実は…DARKERが明後日何かをするということを聞いて……クールアイさん、もしかしてポケスロンドームにいますか？』

「能力が開花して来てるみたいだな。じゃ、任務中だから切るね」

クールアイは短く会話して、電話を切り、天井の穴へ消える。

蓋を閉めたすぐ後に、黒い服を着た二人組がその場にやってきた。

「確かにここで話してた声が聴こえたんだが…」

「お前、耳だけは良いもんな。手持ちはミネズミだし」

「おっかしーな。いた気配はあるよなあ、みいこ」

「デユ！」

ミネズミは頷いて辺りを見回す。

（危ねえ…）

クールアイは久々に冷や汗を流した。

ともかく、この場に長居は無用だ。いや、寧ろ危険だ。

しかし、そんな彼を見つけていた人物がいた…

「国際警察の警視様がポケスロンドームの何を調べてるのかな？」

「?!」

「ヒヒダルマ、」

影はポケモンに何やら指示をして踵を返す。

「ビマ！」

ヒヒダルマは炎を纏わせた身体をクールアイに激突させる。

「く……！リッチー！」

グライオンがボールから飛び出して、ヒヒダルマの技を大地の力で消し去った。

しかし、その勢いは止められなかった。

ヒヒダルマは真っ直ぐクールアイに向かっていった。

「ポケモンが強くて、トレーナー自身が弱ければ意味が無い。……消えな」

ドガン！

ヒビダルマはクールアイの正面に真っ向からぶつかり、クールアイをドームから吹っ飛ばした。

「ぐあー!!」

「グライオー!!」

リッチーはクールアイを追って、ドームから飛び出す。

「計画は予定通り決行する。後、破れた部分の修補を明日までにしてくれ」

『承知しました、N様』

ポケスロンドームには少しずつ暗雲が立ち込め始めてきていた……

Chapter. 46 すぐ傍にある危機（後書き）

九月三十日の決勝戦で爆発とはなかなか凄いです。DARKERのN様はまんま白黒のNです。

向こうの話では出ないので。

[2010／9／10]

Chapter. 47 1on1バトル予選ㇿ巻(前書き)

チユキ「…昨日あれから忙しかったんですけど」

ナツマサ「しかもすごく大変なことを聞いてしまった……」

サトシ「作者にも考えがあるんだよ。ってゆーかスゲーおもしろいんだけど！」

ユカリ「アニメ以上でダイジョーブ☆」

ナツマサ「母さん、ヒカリさんになってるって！いくら似てるとはいえ……」

チユキ「アニメって言えば、お父さん全然成長してないよね(笑)」

サトシ「永遠の十歳だからな、あれ」

ユカリ「あはは、私のモデルも成長してなかったね(へーへ；四年経ってんのに)」

……雑談になって来たので、とっとと本文行きますか（＾＾；

—

Chapter. 47 1on1バトル予選㉔

九月二十九日。

『レディースアンドジェントルメン！さあこれより始まるシキジカ祭のメイン、ガチンコバトル！抽選にもれてしまった皆さんも楽しんでいてくれ！』

チユキはAグループ、ナツマサはCグループだった。

二人が当たるとするなら決勝になる。

二人には勝ち進まなければいけない理由がある。

クールアイが電話をした三分後に自分達のいる部屋に傷だらけで入ってきて、詳細を話してくれた。

爆発の場所はバトルフィールド。始まりの爆発はバトル開始直後。

皆はすぐにバトルを始めたがるだろう。しかし、それが命取りとな

る。即ち、チュキとナツマサが勝ち上がらなければ決勝戦で多くの怪我人が出る恐れがある為、事情を知っている二人が決勝戦をすれば、爆発のタイミングを遅らせ、欲張ってしまったえばギアルを押さえ込むことも出来るかもしれない。

いろんな面でかなり不利ではあるが、昨日のサトシのアドバイスで手持ちを全部転送してもらったのでそのポケモン達がサトシの命令でギアルを探すこととなったが、決行は明日。今日は観客席で観覧する予定である。

「大丈夫かしら、あの子達」

「大丈夫かどうかは試合次第だな。あの話を聞いてバトルを楽しむ余裕はない。トレーナーとポケモンの絆が試される。いかにして負けない試合運びをするにかかっている」

チュキはAグループ第三試合、ナツマサはCグループ第四試合だ。

グループには十六名がおり、トーナメント戦である。

即ち四回（最低でも三回）勝つと明日の本戦に加わることが出来る。

因みに明日の本戦枠は八名である。

『Aグループ第三試合はビシャスのバンギラスとチュキのリングマの対戦だぁ！相性面ではチュキ選手圧倒的不利だが一体どうする？試合開始！』

「Wild、シャドークローで地面を！」

「バンギラス、ストーンエッジ！」

Wildに尖った無数の岩が向かって来る。

「バレットパンチで打ち落として！」

次々に向かって来る無数の岩を鋼の拳で打ち砕く。

「高速移動からアームハンマー！」

全ての岩を砕いた後、素早くバンギラスの懷に飛び込み、効果四倍の格闘技を急所にぶち込む。

「何っ?!」

『バンギラス戦闘不能！リングマの勝ち！なんとリングマ、ノーダメージで勝ち上がり！凄いトレーナーが現れた！』

「どうやら杞憂のようだね。チユキは心配なさそうだ。問題は…」

「ナツマサね」

「チユキのシールドの使い方を応用できたら強いんだけどな。」

Cグループの三回戦も終わり、次はナツマサである。

『小さい身体に秘めたる力、ナツマサのニューラ対雪女の真骨頂、リーナのユキメノコ！女同士の氷の戦いが始まるぞ！』

Dグループの説明をし、いよいよ第四試合がスタートとなる。

『それでは第四試合…スタート！』

「スノウ、霰ですわ！」

フィールドに氷が落ち始めていた。

「雪隠れか。一気に決めるぞ、騙し討ち！」

ナツマサは基本技巧派だ。ごり押しで勝ちを狙うことは余り無い。

更に鋭い爪の効果が発動し、ニューラは技を急所に当ててるのに成功していた。

『ナツマサのニューラ、僅か一ターンで勝負を決めた！』

「冷静に決めたわね。相性に助けられたわね……」

ユカリはふう、と安堵のため息を漏らす。

「いや、ララはかなり素早いのに、相手が先に技を出したのはナツマサが相手の行動を判断しての事だから……なるほど、強くなったな。シゲルにそっくりだよ」

サトシが言葉を追加する。

ユカりは感慨深くナツマサを見ると、ナツマサは気づいて手を降ってきた。

ユカリも大きく手を降る。

「良くやったね！」

ナツマサはユカリにブイサインを向けた。

—

Chapter. 47 1on1バトル予選ㇿ(後書き)

とりあえず、二人とも一回戦突破(r

チユキ「動いてよ、君の胸♪メモってよ、僕の夢♪」

ナツマサ「あの人に届け、H@ppy—Star☆」

二人「うごメモはゝてなゝ♪」

何でいきなり“うごうご☆メモって★Haten@”?!

チユキ「涼華さんがうごメモ嵌まったきっかけがこの曲なんだって。私達に出演してって言って来たから覚えてるの」

ナツマサ「あの人大丈夫か？今週末にはポケモン新作買うつて言つてたし…」

俺も買うんだけどな。姐御はホワイト、俺はブラック。

って姐御来てたんかよ！

チユキ「話が段々面白くなってきたね、って言ってたよ。期待してるみたいだね！」

お、へ？？？マジで？！

ナツマサ「飽きっぽい雅之にしては頑張ってるな、って。確かにここまで頑張ってる作者見んの初かもな」

姐御、一生ついて行きます！

「2010／9／15」

Chapter. 48 1on1バトル予選ㄱ式

お昼前には六十四人居た人数は三十二人に減っていた。

書き忘れていたが、本大会には規定がありポケモンは覚えている技から最大四つの技しか使えないようになっていいる。

そればバトルごとに変えてよい。

この規定からほとんどの人間は早期にバトルの決着をしたがるが、そんな中多彩な技で相手を翻弄するチュキのリングマのWild、相手を瞬時に分析して的確に急所について来るナツマサのニューラのララは異才を放っていた。

特にチュキは魅せるバトルをして観客達の目をさらっていた。

砂起こしでフィールドに砂が舞う時でもチュキは冷静だった。それどころかシャドークロウで砂嵐のわずかなダメージを打ち消したのだ。

この意外な技の采配に、他の対戦を見ていた人は一気にチュキの方に向いた。

更にストーンエッジをバレットパンチで打ち砕いた時は会場がざわめいた。

「なるほど、岩タイプの技を鋼タイプで防御したわけか…出来るな」
そう言ったのはハウエンチャンピオンの石路醍醐ツワブキダイゴだった。

チユキは技の制限四を最大限に生かしたバトルで会場を沸かせた。

一方でナツマサは素早さの高いニューラはすぐに技をだそうとはせずに相手の動きに合わせた技をラグ0で指示を飛ばしていた。

ラグの時間は必ず生じる。短くても0・2秒のズレが生ずる。

しかし、ナツマサとニューラの間にはそれがなかった。

時間にして、五秒で決着がついたのはポケモンバトルの歴史の中では殆ど無いに等しい。

人数が余りに多いため、予選一回目はバトルフィールドを二つにわけて同時進行していた。

午後からは一つずつの試合である。

タイムスケジュールはすべて決まっている。（それで時間がかかった（笑））

昼休憩。

チユキはWildと二人、明鏡止水をして気持ちを落ち着かせていた。

“…………”

どこからか、誰かの声が聞こえた。

チユキは聞こえない振りをしたかったが、勝手に聞こえてくる。

“いかがが致しましょう、ゲーチス様”

すると、もう一人の声が厳しくなる。

“今この場ではNと呼びなさい”

“も、もうしわけありません！N様”

“賢人を集めるのは時間が掛かります。それまでに、出来るだけの事をする必要があります。時の波紋では私の命を繋ぎ止められませんが…何か他の手段を使わなければなりませんね…”

「Wild、時の波紋って聞いた事ある？」

チユキは明鏡止水を辞め、隣で精神を静めていたWildに質問する。

「時の波紋…セレビィが時渡りした際に発生する残留思念だが…他者が触れるとたちどころに辺りの森が死滅すると謂われている。本当のところはわからんがな」

（時の波紋では…不完全？）

チュキは考える。ゲーチスという名を隠した人物は、完全を求めている。そのためには、何をしてでも厭わない。

狂っているとしか言いようがない。

それに賢人を集めていると聞こえた。それが何故必要なのか、チュキには判らなかった。

「しかし、時の鍵というものは波紋が集まったものでな、それはいつ何時でも時渡りが出来るだけでなく未来を見せる機能もあって、それはセレビィの命とも言われているんだ」

「へえ…、波紋が結晶化した物が……」

「セレビィを殺さない限り、完全な時の鍵は手に入らない。一番安全な場所なんだ」

チュキは、ひとまず時の鍵の話を隅に追いやり、また集中した。

そんなチュキを見つめる黒い影に、二人とも気がつかなかった……

—

Chapter. 49 魂の呼ぶ方へ（前書き）

ちょっと本編外れます。

黒白でも説明していますが、こちらではゲーチス視点で解釈していきます。

—

Chapter. 49 魂の呼ぶ方へ

頭の左半分をマスクで覆った人物は、少し怒っているようだった。

隠した名前を言われたのが腹立たしかったのだろうか。いや、そうではない。

先程、イノセントを持っている人物らしい目撃情報を得てから眉の間に皺をよせていた。

イノセントの能力は研ぎ澄まされていく事により、各々に合った力が解放されていく。

イノセントは生まれついていたものではあるが発現ともなると、それは大きく異なる。

と言うのも、生まれ育った環境によっては若年で発現したり、周りの風土にも関係があり、長く発現しなかったりと未だに謎が多く、年月とともにイノセントは急速に衰退し、この時点では十年に一度生まれるかどうかというところまでに落ちている。

しかし、それにも例外がある。例えば、人間とポケモンの間に生まれた半獣^{はんじゅう}である。

彼等はイノセントでなくとも会話等がたやすく出来る。それに該当するならば非とも捕らえて彼等を利用することを考える。イノセントであるなら、使い方を誤れば暴走する事を鑑みて殺さなければならぬだろう。

「いかがなされますか、N様」

「うむ……もしその人物が勝ち上がるようであれば、対策を考えよう。皆にこれ以降は筆談で話をするように伝えなさい」

「畏まりました、そのように致します」

「伝えるのも筆談でやりなさい」

「承知しております」

その人物は頭を下げて、部屋を後にする。

「イノセントなら危ういが、半獣ならばどうにかなるでしょう。彼らの力は研究のしがいがある…」

しかし、彼はこのあと直ぐに、半獣の本当の力を知ることになる。

—

Chapter. 49 魂の呼ぶ方へ（後書き）

半獣とイノセンスの明確な違いは黒白に記載されています。

どちらか片方でも読んでくれたら有り難いですが、両方読むと内容がより深く理解できると思いますので、是非御拝読願います。

[2010/10/25]

Chapter. 50 本戦前夜（前書き）

さあ、戦いは割愛して（ヲイ！

9月29日の夜。

それぞれの夜を書きました。

—

Chapter. 50 本戦前夜

午後のバトルで人数が三十二名からグループ上位二名の八名が決まった。

残ったのは以下八名←

A—1

チユキ（リングマ）

A—2

カナエ（ロズレイド）

B—1

ナホヤ（ドサイドン）

B—2

ユキサダ（レントラー）

C
—
1

ナツマサ（ニューラ）

C
—
2

ダイキ（サーナイト）

D
—
1

ユリア（ヤドキング）

D
—
2

マリナ（ギャロップ）

＊ ＊ ＊

「勝ち上がってきたか…それに、ニューラを使う彼も……半獣やもしれぬな」

技の出し方でイノセントか半獣かを見分けられる。

チユキという彼女とナツマサという彼は、間違いなく半獣だ。それも、親は神クラスのポケモンだということも判る。

体に纏う気品から容易に想像がついたためだ。

単なる半獣ではない。それに、神なるポケモンの存在もその傍に反応している。

（人間に……化けているのでしょうか……？）

しかし、気配だけでは断定が出来ない。

明日の爆破は慎重に行わなくては……

＊ ＊ ＊

自然公園グランドホテル一階に、ナツマサはいた。

「なるほど、進化しても申請してあるポケモンなら構わないのですね」

「ええ、そうよ！トレーニング室も空いてるから、誰かとバトルして経験値を稼ぐのも良いし、公園の叢で鍛えても良いの。頑張ってるね！」

ナツマサはコンシエルジュのお姉さんに大会の事を詳しく聞いていた。

「ありがとうございます。そういう事なら今すぐ出掛けよう！ララ、行こう」

ニューラのララとナツマサはパークエントランスに走っていった。

「……ふふ。是非頑張ってくださいね」

そのコンシエルジュは雰囲気を変えた。

耳につけているイヤフォンマイクから声が聞こえた。

“大会参加者に怪しい奴はいなかったか、ブルースカイ?”

「こちら、以上ありません。クールアイさん、容態は…?」

“明日には落ち着く。時間ギリギリになるかもしれない…サトシとユカリに応援を頼んである”

「判りました」

コンシェルジュは部屋の番号を押して、受話器をとる。

「こちら、フロントでございます。お客様にファックスが届きましたので、転送します」

手際よく、FAXを起動してそれを送る。

＊ ＊ ＊

「どうしたの、サトシ？」

「うん？」

サトシはFAXの資料に目を通している。

「大会スタッフの名簿と、大会参加者のトレーナー情報だ。ヤツラが痕跡を遺しているわけは無いだろうが、参考になるからな」

「流石ね。仕事の方はどう？」

「どれもやったこと無いから、ヒーヒー言いながらなんとかやってるよ。ユカリは、今ナナミ博士の手伝いしているんだっけ？」

サトシは、資料から目を離してユカリを見る。

「うん。ナナミさんはポケモンを研究っていうよりその生体に興味があって、地域によって技の覚え方や威力、特性に違いがあるみたい。ほら、サトシのリザードンって他の地域では覚ええないメタルク

ローを覚えてるでしょう？それを調べているの」

「なるほど、確かに注目されるな」

サトシは感心した。

その横で、チユキはリングマのWildと明日にむけて殺陣の特訓をしている。

「左腕で防ぎながら右横から技。防ぎながら攻撃。一番原始的だけど、時にそれが効果的なよね」

『なるほど』

「じゃあ、続けるよ。Bore、構え」

ヌマクローのBoreはWildに構えを向ける。

このBore、戦いになると忽ち顔付きが変わる。Wildに引けをとらないほどバトルには熱心だった。

進化後、二足歩行になった事で腕に力が有り余ってしまうようになったのだ。普段体をだらけさせないと、すぐに疲れてしまう。

Boreは天性の戦士なのだ。

Bore『手加減しませんよ?』

Wild『望むところだ!』

「十分間の乱取り、開始!」

チュキの声を皮切りに、二人の戦闘が始まった。

—

Chapter. 50 本戦前夜（後書き）

N（若きゲーチス）は不安と焦りを、

ナツマサは戦うことに楽しさを、

大人達は万全の大会の対策に毅然と、

チユキはポケモン達の強さに安心を

それぞれ感じております。

決戦の地で、誰が一番になるのか。

そして彼らの真の目的とは……

待て、次回！

$$\begin{bmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \\ \hline 1 \\ 0 \\ \hline 2 \\ 9 \end{bmatrix}$$

Chapter. 51 本戦／朝の風景（前書き）

時間が空いてしまいました。

しかし、レントラーとリングマの対戦が決まってからはどんなバトルにするか検討しておりました。

漸く案も固まったので、お楽しみに！

では、そんな日の朝の風景をどうぞ。

—

Chapter. 51 本戦／朝の風景

9月31日―

チユキ達の部屋からさほど遠くない部屋から布団の音が聞こえた。

バフン！

?? (女) 「おっはー！」

耳元でいきなり騒がられ、不機嫌な男。

同じく、不機嫌そうな女がその男の上に横に乗っている。

?? (男) 「…エクレ…：重い」

エクレ 「…ユキサダ、絶対あの女に勝ってよね！」

…：説明しよう。エクレはチユキと準々決勝で戦い、コジヨンドをリングマで倒されてしまったのだ。

それも、秒殺だった。

道具…毒々玉十特性…早足十技…空元気はかなりの威力で一瞬も触れることなく倒されてしまったのだ。

ユキサダ「あのリングマ、相当な強さだからな……俺もあっさりやられたりして」

本戦一発目はAグループ一位のチユキとBグループ二位のユキサダである。

ユキサダ「……ってか、エクレ…何だよ？たぐ、人が気持ち良く寝てるところを……」

エクレ「私は悔しくて寝られなかったの！それにユキサダがあんまり気持ち良さそうに寝てるからムカついたの！」

ユキサダは呆れる。

ユキサダ「いつも言ってるだろ？負けた試合を引きずるなって…」

しかし、エクレの癩癩虫は止まりそうになかった。

エクレ「相性では絶対有利だったのに！」

それだけならまだ良かったが、更に悪いことに技が急所に当たり、技の威力が合わせて4・5倍になったのがエクレの癩に障ったのだ。
(同タイプ1・5×技効果1・5×急所2)

勿論、チュキとて狙った訳ではなかった。

半分以上削るのが目的だった技のはずだったのだ。

右手に影の爪と、左手に力を込めたメガトンパンチを構えて、相手の攻撃を待ったのだが、急所に当たった為コジョンドはそのまま目を回したのだった。

更に悪いことは、ランダムフィールドで出現したのはなかなか経験したことのないまさかの雪フィールドだったため、コジョンドは技を受けた際、自分の襟足を踏ん付けて頭を打ち付けてしまったのだ。

まあそれは、審判だけが気づいたことではあるが。

その時の審判の言葉はこんな感じだった。

「コ、コジョンド戦闘不能？ よってこの試合チユキのリングマの勝利？」

語尾が上がりっぱなしだった。

一番信じられなかったのは無論エクレだった。

* * *

ナツマサ「はーす」

サトシ「おはよう、ナツマサ。どうだ？ ララの方は」

ナツマサの後ろから、マニョーラのララが欠伸をしながら出てきた。

ララ『はよーっす……ふわあああ……』

昨日の特訓疲れか、眠そうである。

対照的なのはチユキとリングマのWildである。朝から正拳付きの練習をしている。

チユキ「式、式！式、式！」

Wild『ふんっ、ふんっ！ふんっ、ふんっ！』

今日は両足の蹴り上げもしており、どんどん逞しくなるチユキとWildである。

ナツマサ「どこの格闘道場だよ。そんなに鍛えんのホント半端ねえな……」

サトシ「俺とカスミの娘だからなあ」

サトシは豪快に笑う。

ナツマサ（イヤ、笑い事じゃねえって…）

ナツマサは呆れて、チユキの朝練を見ていた。

チラーミィを連れたユカリはそんな二人を楽しそうに眺めていた。

「二人とも、頑張ってるね！」

ナツマサ「うーす」

チユキ「押忍！」

ナツマサは目を点にした。

ナツマサ「…まんま格闘家になってる……」

チユキ「下段回し蹴り！」

Wild『押忍!』

サトシ「ローキックって言うんだけどな、それ」

ナツマサ「無視かよ」

チユキ「今日の持ち物はこれ、達人の帯よ」

チユキは使い込まれたような黒い帯をWildに渡した。

チユキ「ここからは力が最重要になるわ。小細工はしないで、身一つで決めるためのものよ」

Wild『押忍!』

チユキ「ナツマサ、絶対負けないでね」

ナツマサ「…! たりめーだろ」

—

Chapter. 52 本戦／触発

四人が朝食に降りると、チユキに視線が突き刺さった。

主にこれから戦うであろう六名の視線だ。

「ナツマサは眼中にないのだろうか。」

チユキはその視線を挑発するように、ナツマサに話す。

チユキ「ナツマサ。私と戦うって約束したんだから、決勝まで絶対負けないでね！」

ナツマサ「お、おうよ！」

サトシ（あー、昔の俺だなあー）

ユカリ（ホント、昔のサトシにそっくり）

すると、三人の視線がナツマサに向いた。

しかし、サトシはなにやら違和感を感じていた。

(…おかしいな。何だか誰かに操られているような……)

ユカリはベルセウスの眼を解放し、彼等を見る。

彼等は紫の何かで操られている…

ユカリはP-P h o n eを取り出し、何やらやっている。

サトシは二人に話しかける。

「さあ、朝飯だ。ちゃんと食べて力つけないと勝てるもんも勝てなくなっちゃうぜ」

「「はい」」

「よし」

二人が食券を買いに行く。

(…どうだ、ユカリ?)

(デスカーンかも知れない。油断は禁物よ)

サトシは静かに頷いた。

(ゴースト系に操られている奴を相手に勝てれば、エンジンジムでもやっていける。しかし、気をつけないとこちらがやられてしまうかもしれない…チユキの初戦は見逃せないな)

(そうね…)

—

Chapter. 52 本戦〱触発（後書き）

後書き…？

す、進まない……！

トーナメント後のストーリーは出来たからトーナメントやらなきゃ
……

なのに進まない！

自分が恨めしい…（ノ―・。）

次回から本戦スタートです！

「2010／11／22」

Chapter. 53 本戦／第一試合（前書き）

雅之「……」

チユキ「……………」

ナツマサ「……………」

雅之「……えー、ゴホン…」

チユキ「言いたいことあるならどうぞ（へーへ）」

ナツマサ「事と次第によって態度変えるけどな…」

三人「……………」

後書きに続く。

—

Chapter. 53 本戦／第一試合

朝餉を済ませた本選の選手達はピリピリした空気のまま、会場入りする。

息が詰まりそうになりながらも、チユキとナツマサは所定の位置につき

チユキと相手がバトルフィールドに向かう。

ふと、相手のユキサダからなにか別の気配を感じた。

チユキはちらりと対戦相手であるユキサダのほうを見ると、目に光がないのに気がついた。

「?!」

（何かに……操られてる……?!）

チユキは確かに霊の力を感じている。

（霊の力を弱めるためにはバトルに勝たないと……絶対に、負けれない！）

『本選第一試合！その身一つに秘めたるパワー、チユキのリングマ！広域のスペシャリスト、ユキサダのレントラー！』

バトルフィールドは通常のものだ。

チユキはバトル開始後、すぐに指示を飛ばした。

チユキ「Wild、フルパワーで地震！」

リングマは足元にあらん限りの力をたたき付けて、地震を起こす。

その技はフィールドどころか、スタジアム全体を揺り動かした。

サトシ「おわっ！」

ユカリ「ちょ…！」

サトシ「どこにそのパワーあったよ?!」

チユキの親であるサトシでさえ目を丸くした。

ユカリ「でも、鋼タイプを持つギアルには効いてるんじゃない? 皆、ギアルが気絶してる今のうちに回収よ!」

ユカリは冷静にポケモン達に指示を出す。

ポケモン一同「了解!」^{ラジャー}

一同はこの試合の隙に、ギアルを回収することにした。

しかし、レントラーは地面に接していなかった。

チユキ「っ、背後に十字手刀!」^{クロスチョップ}

レントラーの技を相性のいい技で相殺する。

ユキサダ？『騙し討ちは不発か……辻斬り！』

レントラーはすぐに距離をとり、黒い刃を放つ。

チユキ「充分に引き付けて、十字手刀！」

辻斬りはまたも相殺される。

ナツマサはモニターから試合を観戦している。

ナツマサ「チユキ、戦いづらそうだ……」

チユキ「…もう一度、フルパワーで地震！」

チユキは自分の体を少しだけ浮かしてダメージをなくす。

またスタジアム全体が震撼した。

体力は減らないが、変わりにフルパワー地震を使う反動で、リングマには疲労が見て取れた。

ユキサダ？『無駄だ。雷の牙！』

チユキ「アームハンマー腕金鎚！」

レントラーが雷の牙を当てるより早く、リングマの腕がレントラーを捉えた。

レントラーは技の威力にくわえ、急所に決められて倒れてしまう。

ユキサダ？『ちい、弱いポケモンだ』

しかし、チユキには戦いはまだ終わってなかった。

チユキー（トレーナーの影に陰の爪！シャドークロー）

リングマは誰の目にも付かないほど素早く、ユキサダの影に爪を入れた。

ユキサダ？『油断したね…これほどとは……』

ユキサダの軀から紫の気配が消える。

チユキ（倒せたかしら…？）

Wild「手応えは。倒せたかどうかは……五分五分」

ジャッジが響く。

『レントラー戦闘不能！この勝負、フタバのチユキの勝利！』

チユキはリングマと握手をする。

チユキ「ありがとう」

Wild「ある程度ギアルを鎮めたであろうか？」

チユキは小さく頷く。

—

Chapter. 53 本戦／第一試合（後書き）

雅之「すいませんっしたー！」

チユキ「…まあ、いいか」

ナツマサ「サボってたわけじゃねーし、それに忘れてた訳じゃないしな」

雅之「ありがてえ！」

チユキ「リアモンハウスするほど馬鹿じゃないわよ」

ナツマサ「遅くなっても良いから頑張れよ」

雅之「はいっす！（ノ・。）」

[2011/3/5]

追記。

お待たせしてすみませんでした！

—

Chapter. 54 本選（第一試合）「舞台裏」

チユキのスタジアムを揺るがす地震は、下層に仕掛けられたギアルを気絶させるための独断だった。

しかし、サトシとユカリはそれを理解しスタジアムの随所にいるギアル達を探すことにした。

一番危険な場所であるスタジアムの下には、ギギギアルと言うギアルの最終進化系が二体とも目を回していた。

サトシ「流石だな。あれはこれを鎮めるためのものだったのか……」

ユカリ「ホワイトボールで検挙ね」

ユカリはサトシに真っ白なモンスターボールを渡す。

サトシ「ホワイトボール？」

ユカリは簡単に説明する。

ユカリ「イッシュの奥地にある、オーレ地方覚えてるでしょ？ほら、レーキが臨時保安官で廻った場所」

サトシ「ああ、あのイーブイ使いか。確かスナッチでポケモンを奪っていたっていうシャドーが活動拠点にしていた場所か」

ユカリ「そう。普通なら他人のポケモンをとったらボール管理システム上弾かれるんだけど、悪い人から取り返す際にレーキはそのスナッチマシンを使ってみんなをリライブさせたんだけど…そんなマシンをいちいち作るより、それ専用のボールを作った方が早いって結論が出て出来たのがこのホワイトボールって訳。もちろん非売品で警察官以外には通常使えないように制限があるのよ。今朝、クールアイさんが私にいくつか渡してくれたの…今のうちに確保よ」

サトシ「なるほどなあ。よしっ」

サトシがボールをギギギアルに放ると、中から白い手錠のようなエフェクトが飛び出してギギギアルをボールの中に引き込む。

サトシ「……作り込まれてるな」

ユカリ「ボーツとしてる隙はないわ。他のギギアルやギアルも確保よ」

サトシ「へいへい」

ホワイトボールを回収するユカリについていくサトシであった。

ギアル達の回収が一段落したところで、また地震がスタジアムを揺らした。

サトシ「もうすぐ試合が終わるらしいな。急いで戻るぞ」

ユカリ「私達に知らせる為の地震ね」

サトシ「まあ、あのリングマなら負けないだろうな」

ユカリ「サトシってそんなに親バカだったっけ？」

サトシ「……ポケモン馬鹿って言ってほしかったなあ………」

サトシは少し拗ねたように、ユカリを睨む。

ユカリ「へ？何で？？」

ユカリは訳が分からずに眉間にしわを寄せた。

試合会場が盛り上がっている。

どうやら決着が付いたようだ。

サトシ「じゃ、後は任せたよ。ゾロアーク」

サトシはダークボールからゾロアークを出して指令を出す。

ゾロアーク『御意』

ゾロアークはスタジアムの下層に潜り込んでギギアル達の幻影を作り上げた。

* * *

試合終了後、ギアル達の様子を見に来た係員は念の為に薬で回復させる。

が、その薬はゾロアークが回収しエネルギー満タンとなった。より幻影がリアルになった。

ゾロアークは侍のように身体を構え、一瞬たりとも気配を悟られまいと静かに立っている。

幻影を絶えず動かすという事も実は相当な精神力をもって行っており、ギアル達の歯車の音等が一番大変なのである。

幻影は悪を極めたポケモンにしか出来ぬ諸行で一部のダークライやゾロア・ゾロアークにしか使いこなせないのだ。

反転世界を支えるグラティナでさえ習得にはかなりの年月を要するし、グラティナには役目もあり幻影を学習する暇などなかったのだ。

一方ゾロアやゾロアークはその幻影の能力があまりに高いため、昔ですら多く棲息していたが乱獲の憂い目に遭い今は棲息数自体が少なくなってしまうている。

彼等の棲息数自体は、実はそんなに変動してはいない。そういう幻影を使える知能の高い個体により護られているのだ。

ある程度トレーナーの力が高ければ、トレーナーの前に姿を見せる。ただそれだけの事。しかし、出逢うだけならば誰にも出来るが、それを越えて仲間にするのは強いポケモンへの愛情がなければそれは非常に難しいのである。

サトシのゾロアークは以前ゾロアの時に懇意にしてもらった恩から、彼の仲間になったのだ。

ひとまずは処置できたので、急いでスタジアムに戻ると、チユキがリングマのWildと握手をしているのが見えた。

負けたトレーナーのほうから霊の気配はなくなっていた。

サトシ「どうやら、ゴーストタイプの方も攻略したようだな」

ユカリ「もちろん、まだ油断はできないけどね…でもまあ、心配なのはナツマサの方よ」

サトシ「ああ、そうだな……」

Chapter. 55 夢の先

チユキは戦い終えたリングマのWildにねぎらう。

「よく戦ってくれたわ（ある程度のギアル達は倒せたと思うわ）」

Wildは、軽く頷いた。

『うむ。相手がレントラーだったから地震の技は当然だな』

「（本来の目的は達成できたと思うわ…多分ね）」

チユキはウィンクして、これから戦うナツマサに合図を送った。

それに気がついたナツマサは、静かに頷いた。

「…行くぞ、ララ」

『ん。…任せとけ。絶対勝ってくっから』

マニニューラは鋭い爪をチュキに振った。

「がんばってね！」

『ちよりっす』

チュキはその言葉に引っ掛かりを覚える。

「（誰かの口癖だった気がするけど、…気のせいよね）」

―不意に視界がぐらつくチュキ。すぐにWildが支えてくれた。

『チュキ殿?!』

しかし、ものすごい眠気に襲われチュキはそのまま寝てしまう。

＊ ＊ ＊

チユキは不思議な空間で目を覚ました。

自分の体が急に大きくなっているような気がした。

口を開こうとするが、

「クオーーーーーッ！」という声しか出せない。

頭を振って空を仰ぐと、何かの技が破裂して辺りに隕石のように降り注ぐ。

チユキは更に声を高く叫ぶ。

「クオーーーーーーッ！」

それは技になり、辺りに音の衝撃が伝わって……

* * *

チユキはそこで意識を現実に戻した。

Wildが不安そうな顔でチユキを抱えて見下ろしている。

Wild『大丈夫でござるか、チユキ殿？』

チユキは訳がわからなかった。何故自分が眠気に襲われたのか、何故あのような夢…いや、夢とは思えないあの場所は異質であった…を見たのだろう。

チユキは動揺を隠せなかった。しかしWildを見て起き上がる。

「私なら平気……よ。待機所に行きましょ、早くしないとナツマサの試合始まるわ」

Wildは頷いて、チユキの後に続く。一抹の不安を抱えたまま。

チユキは今見た夢を頭から振り払い、急いで待機部屋へ行く。

—

Chapter. 56 新たな仲間（前書き）

雅之「……ぱたり……。ω。」

涼華「Σ（・Δ・；）雅之？！」

…返事がない。屍のようだ。

涼華「雅之ー？」

チユキ「因みに、決勝戦諦めた様子です……楽しみにされた方、すいません」

141

ナツマサ「流石にリアルモンスターハウスするのは可哀相だな……
あんなに頑張って代替案捻り出して、燃え尽きたんだから」

涼華「雅之ー、起きろー」

チユキ「ほ、本文をどうぞ」

Chapter. 56 新たな仲間

2005年、八月十五日ー

それは突如として豊苑を飲み込んだ。
豊苑大災害と呼ばれた隕石落下事件。

その隕石の因果か、豊苑に突如として他地方のポケモンの出現、新たなポケモンの発見があった。しかし、その背後でブラック・ホール団、ホワイト・ホール団という不思議な集団が活動を始めていたー

それから四年後、豊苑に新たなチャンピオンが生まれた。彼の名は一樹：柊木一樹。

その彼がブラック・ホール団、ホワイト・ホール団両名の暴走を止めたという。

しかし、その柊木一樹は交通事故によって死亡してしまったのだが、本当の所はどうかわからなかった。

それから直ぐだった。一日本を皮切りとしたポケモン恐慌が始まったのは。

彼の心にあつたものは小さな小さな棘だった。誰も、その棘に気がつかなかった。

その棘はどんどん膨らみ、ポケモン恐慌が終わるときその棘は一つの絆を粉々に砕いた。棘はその人間の意識を乗っ取ることに成功した。顔の左半分を失った人間はその怪我の原因である相棒のバンギラスを……殺した。それはその人間が望まない事だったのだ。

その絆を粉々にされた者は手術成功後、日を置かずに病院から消えた。

そのものの名前は：ゲーチスⅡジョシユアⅡハルモニアであった。

時が流れ、彼は現在名前をNとして日本のこの上越・関東で人員とポケモン、賢人を探していた。

チユキ達の元々いた世界にはそんな振れはなかった。しかし、チユキとナツマサが時渡りを経験したその時一別の空間に位置するパレルワールドに巻き込まれ……通常なら日本にいないイツシュポケモンの出現や、隠し特性と呼ばれるポケモンが認識されている奇妙な別の世界に来てしまったのだ。

それは、彼等……チユキとナツマサに托された永遠の謎を解き明かさせる為の……言わば一つの解決策だった。

しかし、二人の親である聡と由香里が神なるポケモンの存在であったことからそのパレルワールドは強く激しく歪みはじめる。もう時を戻すことも振曲げることも全く出来なくなってしまった。

しかしそれはまだ誰も知ることが無いし、時の流れに逆らった二人の少年少女を遠い未来に飛ばして記憶を振曲げたことすらも誰にも知ることは敵わなかった。

あの、時を支える守護龍のディアルガですらその時空にいたことが堪えられずに空間を支える守護龍のパルキアの時空に逃れている現状だ。

現世を裏で支えるギラティナも、反転世界と呼ばれる時空から出る

ことが出来なくなった。

あのセレビィのした時渡りがこんなにも激しく時の時空を歪ませてしまった。

しかし、そこから大きく世界が良くも悪くも変わる……言わば終わりの時を急速に迎える……

彼等はいつ、それを知りどのように変えて、どこでなにを実行する—なんて事は野暮な話である。それが本当に実行されるのはまだ先の事である。

その時渡りをしたセレビィの軀にある時の鍵だけが流れを元に戻す、正しく鍵となる。—しかし、その意識を乗っ取った棘はくしくもそのセレビィの時の鍵によって器を生きながらえさせようとしていた。

* * *

…バトル大会はその後恙無く終了し、優勝したチュキは赤と黄色の

カラーリングをしたタマゴを、チユキに惜敗したナツマサは緑を貴重としたタマゴを、三位決定戦で辛くも勝利したナオやは水色のタマゴをそれぞれ授与された。

チユキとナツマサは一度、黄金市に戻ることにして、親とまた別れて旅を続けることにした。

20**年10月1日の朝二人は黄金市に降り立つ。

と、言うのも黄金ジムのレギュラーバッヂが無いとエンジュ手前の関所を通行することが出来ないのだ。むろん、縁寿Ⅱ黄金に住民票が無い冒険者達だけである。一定の職業に携わる人も通行できるようになっている。

一黄金市は上越の大都市で、古くは將軍の台所と謂われていた。その事から黄金は日本食文化が根付いた場所柄か、レストランなどの外食系のお店が非常に多い。

関東の山吹市とリニアステーションが繋がっており、三時間で関東と上越が繋がった。更にGTSや中部国際空港等の巨大ハブ空間が出来た事で黄金の発展は留まることを知らず急激に伸びてきた。

そんな黄金のジムリーダーは最近代替わりした。進藤アカネがポケスロンの会長となった為、アカネの息子がそのリーダーとなったのだ。とは言え、彼はまだまだ遊びたい盛りの少年である。時折黄金から鶯田に遊びに行くことが間々あった。

受付にいるジムレベルに話し掛けるチュキ。

「あもう、今予約無しでバトルって出来ますか？」

ジムレベルはこちらに近づいて、チュキとナツマサを交互に見た。

「うーむ、…明日の十一時なら空いてるが、それでも構わないかな？」

チュキは静かに頷いた。

「わかりました。それでお願いします」

二人がジムを後にすると、突如として二人の抱えた卵が動き、あっというまに孵化した。

『ファ、ファァー』

『リーン、リプー』

二人は目を真ん丸くし、その物体に注目した。

「な、何この子達?！」

チユキは声を裏返させた。

「ファマーに、リープンだよ! 正式にポケモンとして分類されていない、ある意味この地球にとって未確認生物ってところ。だけど、どうして豊苑に突如発生した彼等が景品になってるか、皆目検討は着かないね……ポケモンの言葉が解る僕らでさえ、彼等の言葉が聞き取れない。チユキもそうだろう」

「うん。でも……なんかかわいい……」

チユキはファマーを見て、小さく炎の出るファマーの頭にそっと触れる。ファマーは一つ眼をゆっくりと動かした。

『マゝファゝ』

チユキはファマーの頭を撫でて暫くそうしていると、ファマーは楽しそうに体を跳ねさせる。

『ファマー! マー!』

「よし！あなたの名前はM^{マトル}ATLEよ！」

『マー？？』

ファマーのMATLEはイマイチわかっていないようだった。

一方、リープンはけだるそうにナツマサを見上げている。自分が乗っている葉っぱをお腹に乗せて寝ようとしている。

（完全に俺をナメ切ってやがる……）

ナツマサはリープンを抱えて、ため息を付いた。

「自分で動いてくれよな、リラ」

『リー……』

リープンのリラは以前のB^{ヒノアラシ}eatに似ていた。

チユキは思わず微笑む。

しかし、ギリギリ手持ちである。

マグマラシのBeatにヌマクローのBore、コリンクのLink、トゲピーのFine、リングマのWild、そしてファマーのMATE。

因みにシキジカの斎鹿は一時博士に預けておいてある。

しかもよくよく見ると、タイプが偏っている。

チユキは、二匹を宇津木博士に送ることを決めた。

ふ、とナツマサの手持ちを見ると実にバランスの良いチームだった。マニニューラのララに、アリゲイツの二ノ、トゲピーのトト、ラクライのクク、リープンのリラ…

「ちょい、何でナツマサのパーティそんなにバランス良いの？」

「ん〜？ ああ、確かに。……知るかよっ」

宇津木博士とも相談して、チユキは最終的にこんな手持ちになった。
ファマーのM A T L E、トゲピーのF i n e、シキジカの斎鹿、ヌ
マクローのB o r e、リングマのW i l d。W i l dを手元に置い
たのはどんなタイミングでもキリカに返せるように、配慮した結果
だった。

まだ、時間があつたので二人は一先ずポケモンセンターのチェック
インをすることにした。

—

Chapter. 56 新たな仲間（後書き）

涼華「ファマー・リープンk t k r！かわいいー！」

M A T L E 『ファー♪』

リラ『リー』

涼華「確かアルタイル・シリウス・ベガの御三家よね！どうして彼らを出したの？」

：返事がない。屍のようだ。

チユキ「涼華さんが最近Y o u T U B Eでそのシリーズの実況攻略を見てますよね、ツツコミ入れながら」

ナツマサ「そこから着想を得てね。何匹か出るようになったのさ。後何匹出るかはまだ未定だとさ」

涼華「へー！また見るのが楽しくなっちゃった♪」

[2011/6/13 2011/8/21改訂]

Chapter. 57 博士の電話（前書き）

むぐは……もう、考えられません……

エルレイド
零士「お、お疲れ……でも凄いな。リア充なのにこんなにこっちにも全力投球だし」

これの為に寝る間惜しんでるからな！

零士「……そろそろ寝ようか、マスター……」

Chapter. 57 博士の電話

サカキサトシ《そうか、リープンとファマーが手持ちになったのかあ。それじゃ図鑑に情報が出ないわけだ。：うーん、僕から宇津木博士に伝えておくよ。博士に言えば、Ver4・5にできるからね》

チユキとナツマサはサトシに電話していた。新たなポケモンなのに図鑑にポケモンの情報が出ないのは不便極まりなかったから、ホウエンに二度旅をしていたサトシに聞くことにしたのだ。

チユキ「ありがとう、お父さん。でも結構めんどくさいのね」

サトシ《仕方ないさ。しかし、振じれてしまった時間軸はどうしようもないとはいえ、ホウエンの隕石ポケモンがここまで来るとは想定していなかったな……で、バトルは明日の十一時か。今日はポケモンでも鍛えておきなさい。アカネさんの息子であるタクマ君はなかなかポケモンに懷かれててね、序盤ではかなりの強敵なんだよ。まあ、僕はタクマ君にバトルを少し教えたぐらいだから今はどうなっているのかわからないけどね…確か、チユキより年下だったかな？》

ナツマサ「そういえばジムリーダーって、どうして僕らより年下もいるんでしょうか？」

何度も言うが、P－phoneで同じグループなら同時通話が可能なのは今の時代にも合わせてある。

サトシ《ああ、彼らは父親や母親がジムリーダーである事や、バトルセンスに富んでいることが重要だね。…おっと。…わかった。…今電話中だ。………ああ、すぐ行く。…待たせたね。これからポケモン議会があるんだ。じゃ、よい旅を!》

突然電話を切られたのでチュキは驚いた。今まで突然切られたことなんてなかったから。

しかもポケモン議会なんて聞いた事もない。

ナツマサ「ポケモン議会ってね、確かポケモン恐慌が始まった頃に設置されたんだ。なんでも、ポケモンに対する政治的影響とかがあるみたいでいろんな事を国会で決めるんだって。その調整役がなかなか決まらないって母さん言ってたけど、サトシさんになったのかなあ」

チュキ「へえ、それじゃこれからあまり電話できないのかあ………」

少し残念そうな顔で、電話を見るとナツマサが若干顔をしかめた。

ナツマサ「チュキってさ…ちょっと親に頼りすぎじゃない?」

チュキ「…そんな事もないけど。確かポケモン恐慌って、七年前に収束したんだっけ?」

ナツマサ「そうだよ。母さんとサトシさんが尽力したって言うけど…本当はアルセウスが収束させたんだってもっぱらの噂なんだよね。でもどっからそんな話が出たんだろうな？」

チユキは目を輝かせてナツマサを見た。その声は嬉々迫るものがあった。

チユキ「アルセウスって、あのアルセウス！？えっ、すごーい！この世界を生み出したっていうあのアルセウスでしょ！？ミユウはすべての生物の大元って言われてるけど…それ以上に凄い存在のアルセウスが！？信じられない！」

ナツマサ「噂だぞ？そんな確証何処にもねえし…噂の出どころも不明瞭なんだから？？そもそもアルセウスが世界を生み出したなんて神話だからな。何処までが真実で何処からが空想なのかわからないままなんだ」

ナツマサは興奮しているチユキの声が耳に響いたのか、片耳をふさいで警告した。

チユキは憤慨しながらも声のボリュームを落とした。さすがに声が大きすぎたようで周囲の目がこちらに集中していたからだ。

チユキ「あら、最近の事なのにそれが曖昧だなんてそもそもおかしいじゃない！それに、本来私たちが知りえて当然のハウエン大災害なんてのも過去に起きてるのよ？勿論私たちのもといった世界ではそ

んな事なかったでしょう？もしかしたら私たち、このパラレルワールドを調査しながら旅を進めなきゃいけないのかもよ？」

ナツマサ「それはそうかもしれないけどさ…」

―ところで、二人はジムから場所を移して黄金食堂で会話していた。チユキは薄味うどんに明石焼き、ナツマサは好み焼きに白米を並べていた。なるほど、ジョウトの食べ方である。関東の傍では炭水化物に炭水化物などあり得ない、と言う声が多々あるが地域の境目出身ともなると、それはまちまちになる。

しかし、彼らも周囲の人たちと同様に当然のように炭水化物に炭水化物をとっている。

チユキ「調査していくことで、どこがどう振じれてるのかわかるかも…とにかく、このジョウトがどう変わったか調査していかなきゃね…」

ナツマサ「そうだね。…お？」

二人のP－phoneがやかましく鳴り響く。

その名前は“宇津木 奏太博士”だった。しかし―すぐに切れた。次の瞬間“新しい凶鑑データを入手しています…”と画面に表示される。

チユキ「え、早っっ!!」

ナツマサ「すぐアップデートできるってどういう状況だよ?」

宇津木『最近隕石ポケモンの発現が各地に多くてね、博士はトレーナーに対応するために人数分のそのデータをすぐ送れるようにしなきゃいけないんだ』

チユキ「そうなんですか。にしても早いですね…」

宇津木『いや、実はチユキちゃん達の話声聞いててね。サトシさんと話の途中だったんだ。だからすぐに対応出来たって訳』

ナツマサ「にしたって…?サトシさんと何を話していたんです?」

ナツマサは不意に気になって、宇津木に訊ねる。

宇津木『サファリゾーンが建設中なのは知ってると思うけど、その洞窟に不思議な文様が浮き出たんだ。その調査の話をしてたんだよ』

チユキ「不思議な文様?」

宇津木『まだ詳しい事は調査中だけど、どうも超古代ポケモンの文様みたいなんだ。最下層には青の文様が、中央層には赤の文様が、最上層には緑の文様が描かれているんだよ』

ナツマサ「超古代ポケモン：って言うと、カイオーガ・グラードン・レックウザの三匹の？」

宇津木『そうだよ。さすがナツマサ君は詳しいね。たぶん隕石の影響でこっちに来たのかもしれないけど、まだ詳しい事ははっきりしないんだよね。まあ、近くに行く用事があったら見てみるというかもな。それじゃ、いい旅を！』

チユキは少しP－phoneを操作して図鑑モードを起動させる。

《隕石No. 004ファマー、火薬ポケモン。0.4m、10.4kg。溶岩の中から生まれたポケモン。体に触れるとやけどするほど熱いが、懐いた人にはその体は冷たく感じる。》

ナツマサ「そう言えば、チユキってすぐポケモンに懐かれてたよね？ 孵ってすぐ触ってたじゃん、熱くなかったんでしょ？」

チユキはああ、そうかも。と思いだしていた。

チユキ「ナツマサの方は？」

《隕石No. 001リープン、発芽ポケモン。0.5m、5.0k

g。体の大きな葉っぱで風を起こして、森を移動する。葉っぱは食糧にもなるがあまりおいしくない。≫

しかしそのリラはめんどくさそうにナツマサを一瞥して地べたに眠り込む。

チユキ「あは……随分生意気だね……」

ナツマサ「素直なMattleの方が良いなあ……」

Mattle「マー、マー、マーーー!」

フアマーのMattleは楽しそうに跳ね上がる。

詞が解らないのは逆に良かった。それぐらいの方が、意思の疎通が良いのかもしれない。

本来ポケモンと話せないのが、普通なのに、二人にはその隔たりが旅の途中で無くなってしまった。

話せる事が必ずしもいい事ではない……そういう事だ。

食事の後で、二人はトレーニングに向かう。新しく孵化したポケモンの実力を見極める必要があったからだ。

—

Chapter. 57 博士の電話（後書き）

2011／10／5

Chapter. 58 研究員の日記／柊木博士（前書き）

さあ、本格的に隕石の影響を語ろうじゃないか。という事で東北の柊木博士と研究員にご登場願いました。

一番有力であろう考察を：金星は大げさだったかな？ W W

ここの話を考えるのはかなり難しかったですね。元々入れる予定はなかったの：ここを書かなくちゃ多分読んでいる読者様に伝わらない、とご指摘を受けたの：結果いい感じになったかと。

では、本文をどうぞ。

Chapter. 58 研究員の日記／柊木博士

―公式に認められているが幻の存在と認定されたデオキシスは、隕石と言うよりその個体が地球に飛来したのが始まりだと言っているだろう。

デオキシスの名の由来は見ての通りDNAである。しかし、本当の所はその個体の心臓であるコアがある特殊な力―すなわち、地球外生命を宿したこの地球上では異端扱いされている。

Deoxysと英語名が付いていて、そのままデオキシスと読むのだが、Deoxyは造語系で“―より酸素が少ない”と昔の辞典で記されている。

要するに、デオキシスをはじめとした隕石によって突然変異して生まれたポケモンは酸素が少なくても生きていける異端の生物と扱われ当初はポケモンと認識されなかったのが実状であった。

しかし、2005年の隕石飛来事件で全ては一変した。隕石によってポケモンの生命体に多大なる影響を及ぼし、無機物に命を与えたその異なる生命体をDeoxy生命体と学者内で呼ぶようになった。

彼らを調査しているうちにわかったのは、彼らがどんなに酸素がない空間でも自分で生成し、生きられるだけの酸素量を作っていたわけで、以前はこの太陽系の第二惑星である金星にその姿を捉えたことから、彼らはもともと金星で住んでいたこともわかってきていた。

今は彼らを公式のポケモンと扱っていないだけであり、その状況はいつ公式に変わるか……そういう時期なのだ。彼らはこの地球で次々と増殖を繰り返している。ポケモンたちに悪影響を与えないか、と戦々恐々とするトレーナーもいれば好意的に接するトレーナーもいる。

彼らを有害だと言う人は確かに、少なからず存在している。それどころかその存在を見ても知らないというだろう。しかし、突然その状況が一変した。

全てのポケモンの生息地が突如としてジャムのように混ざり合い、どこでどんなポケモンが出てもおかしくない状況になった。それが今後どのようにこの地球に影響するかどうかはわからないが、慎重に調査をするべきだ。やむを得ない。我々のとった特別措置はこうだ。

もしトレーナーたちが隕石ポケモンに遭遇したら、博士にデータ請求してその追加データを渡す方法が一番良い。だがしかし、それはいつでもどこで現れるかわからない。博士はトレーナーに凶鑑を渡した数だけそのデータをいつでも送れるようにしなくてはならない。

その為にP-phoneの発展は急を要する。CEOの浦山沙羅哉はこれを好意的にとらえ開発部に直接働きかけてくださった。話の分かるCEOだ。Rocket'sの重役を任されるだけある。榊晋也会長の心眼は間違っていなかった。彼になら会社を任せられると、きつとあの時から判っていたのかもしれない。

柊木光成「えーっと、学会で発表した特性の変化とその違いを示した論文は…」

研究員A「あ、これじゃないですか？確かこれ、七海博士が提唱した論文ですよ？」

柊木「そうだよ。実はイッシュ地方のポケモンが出るようになったのも、これが関係してるんじゃないかと思ってね、取り寄せたんだ」

東北地方、ハクジタウン伯治町研究所。ここに昔、彼の息子がいたという痕跡はなかった。

研究員B「それにしても、息子の一樹さん…交通事故で亡くなったとお伺いしていますが、……本当なんですか？」

ヒイラギ博士は表情を凍らせた。

「…そうだよ。それになるべくなら、その話はしてほしくないな。……頼む」

柊木は冷たく言う。奥の自室に引きこもった。

彼は自分の手を見つめて強く握りしめる。…あの時を思い出すと、今でも手が震える。

「……一樹……っ、すまない……」

研究所から一樹の写真を取り除いたのは重く押し掛かった自責の念を増幅させるそれを目のつくところに置いておきたくなかったからだ。一樹が交通事故で亡くなった数日後、真実を知った家内が自殺したのも…全部自分の所為だ。何故…自分が呪われた家系なのか不思議に思っていたが…こういう事だったのか。

運命はあまりに非常だ。そのうえ、容赦がない。なぜ今こうして自分が生きているんだ。それを思うだけで押しつぶされそうな負の感情―それは自家撞着であるかもしれないが、…どうして、それでも生きなければならぬんだ。

どうして。この黒い感情と付き合う事に、犯罪者は冷静でいられるのだろうか。柊木は苦しみ、もがき続けるしかない。それも、警察に認められた隠された犯罪を犯すことになるうとは思ひもしなかった。刑務所に入っても良いぐらいの事をした。なのに、ここで研究なんかしていて良いのだろうか。

―それは答えのない自問だった。考えるたびに頭を締め付けられるような重責に襲われる。生きる事―それが柊木博士に課せられた贖罪となった。―もうすぐ、冬が来る。東北に、厳しい寒さがやってくる。

—

Chapter. 58 研究員の日記／柊木博士（後書き）

2011／10／8－24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057m/>

HEART & SOUL ～ 振れいく末路

2011年10月25日15時59分発行